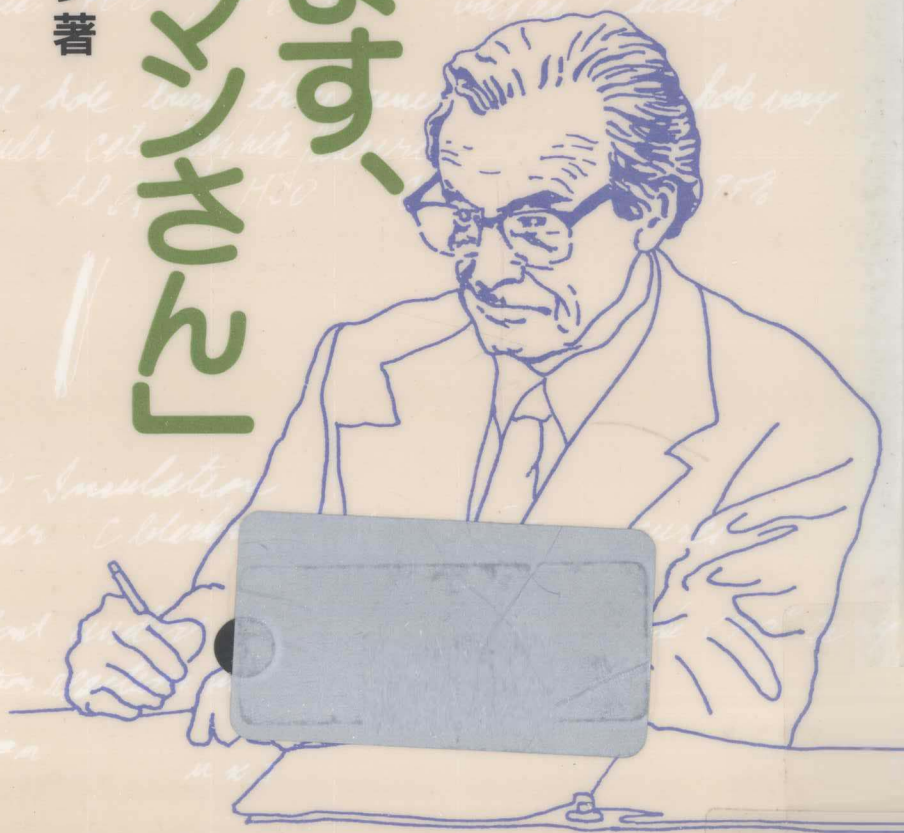


「困ります、 ファイマンさん」

R・P・ファイマン 著

大貫昌子 訳



「困ります、
フアインマンさん」

「困ります、ファインマンさん」

一九八八年七月八日 第一刷発行 ©
一九八八年七月二七日 第二刷発行

定価一八〇〇円

訳者 大貫昌子 おおおのまさこ

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発 行 所 株式会社 岩波書店

電話 〇三三六四二二〇
振替 東京六二六二四〇

印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-005368-X

「困ります、フアインマンさん」

リチャード・P・ファインマン著

大貫昌子訳

岩波書店

WHAT DO YOU CARE, WHAT OTHER PEOPLE THINK?
MR. FEYNMAN GOES TO WASHINGTON
and others

by Richard Feynman and Ralph Leighton

Copyright © 1988 by Richard Feynman and Ralph Leighton

First and originally published in the Japanese language in 1988
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo
by arrangement with Gweneth Feynman and Ralph Leighton.

まえがき

『ご冗談でしょう、ファインマンさん』などというベストセラーが現れたおかげで、今度の本の出版にあたっては、少しく編者の説明が必要になってきたようだ。

まず第一に、たしかにこの本の主人公は以前と同じ人物なのだが、本書の中ではこの「好奇心の権化ともいえるべき」風変わりな人間の冒険」は、いささか趣が変わってきたようだ。というのは、ここでは悲劇的な話が多く、もちろんファインマン氏のことだからふざけているのか本気なのかはつきりしないところもあるが、総じて見るとどうやらご冗談ではなさそうなのである。

第一部には、ファインマンのこの性格を形づくるのに最も強烈な感化を与えた二人の人物、父親のメルと初恋の人アーリーンの思い出を収録した。

第二部におさめたその他の軽い話は、「ご冗談でしょう」的話はこれが最後となるため、ここに収録したものだ。ファインマンはとくに「ワン・ツー・スリー、ワン・ツー・スリー」を心理学の論文にしようかと思ったほど、この話がことのほか気に入っていたようである。

第三部のスペースシャトル、チャレンジャー号爆発事故の調査は、不幸にしてファインマンの最後の大冒険となった。「積極的無責任者」と自称してはいたが、あれほどしょっちゅう非難してい

た「政府」のために、残る渾身の力を捧げ尽したのだ。ロジャース委員会（大統領シャトル事故調査委員会の俗称）が、多大な信用と尊敬とを得る結果になったのは、彼の努力によるところが大きい。事故調査のこの総まくりは、調査終了後二年の間に彼が三回目と四回目の大手術を受け、その後も放射線療法や熱療法などのさまざまな治療を受けていたため、すぐには発表されなかった話である。

一〇年間にわたるファインマンの癌との闘いは、彼のキャルテクでの最後の講義から二週間後の一九八八年二月一五日に、ついに終わった。

そこで僕は彼の生涯のエピローグとして、最も感動的な講演「科学の価値とは何か」をここに加えたいと思う。

一九八八年五月

カリフォルニア州パサデナにて

ラルフ・レイトン

目次

まえがき

I

ひとがどう思おうとかまわない！	3
ものをつきとめることの喜び	63

II

「ワン・ツー・スリー、ワン・ツー・スリー」	81
生れてはじめての教授職	92
トップ・シークレット	97
出世の秘訣	100
歩いたかさぶた	104

ハーマンとは誰だ？	108
「フラインマン・セクシスト・ピッグ！」	113
「困りましたね、フラインマン先生」	120
パップ氏の永久機関	128
「シャベルを持っていきましょうか」	135

III

フラインマン氏、ワシントンに行く	147
——チャレンジャー号爆発事故調査のいきさつ——	
科学の価値とは何か	300
訳者あとがき	317

ひとがどう思おうとかまわない！

ひとがどう思おうとかまわない！

僕がまだ十二か十三の若僧だったころ、どういう風の吹きまわしか、少し年上の、もっと世慣れた連中とつきあうようになった。この連中というのがいろんな女の子をたくさん知っていて、連れ立っては海に出かけていったりする。

その日もみんなで例のごとく海岸に遊びに出かけていた。一行のほとんどは女の子たちといっしょに、突堤の方に行っていたと思う。ある特定の女の子にいささか気のあった僕は、そのとき誰に言うともなく、「ああ、バーバラと映画にでも行きたいな」とつぶやいた。

たったの一言だったが、これをそばで聞いていた奴は、たちまち興奮してしまった。彼は岩のところまで走って行ってバーバラを探しだし、その肩をむりやりこっちに向けて押しながら戻ってきたが、それだけではない、大声をはりあげて

「ねえバーバラ、ファインマンのやつ、君に何か言うことがあるんだってさ！」
と言いつづける。僕は恥ずかしくて穴があったら入りたいかった。

これを聞いた連中はみんな戻ってきて僕を取り囲み、

「何だよ、ファインマン。言うことがあるなら早く言えよ！」

とけしかける。僕はしかたなく悪友一同の前で彼女を映画に誘った。これこそ僕のデート、ナンパ・ワンだ。

家に帰ると、僕はさっそくこのことをおふくろに打ち明けた。おふくろは得たりかしこしとばかり、ありとあらゆる知恵を授けてくれた。やれバスに乗って目的地に着いたら、まず僕が先に降り、バーバラに手を貸すのが礼儀だとか、道を歩くときは僕がいつも車道側を歩くもんだ、とか、話は細かい。おまけにそのとき言うべき文句まで教えてくれた。つまるところおふくろは、母親が息子に次の世代の女性の扱い方を教える……というように、いわば文化の伝授をしていたのだ。

夕飯がすむと、僕はめかしこんでバーバラを迎えに出かけた。何しろはじめてのデートだから胸はドキドキし続けた。もちろん彼女はまだ仕度ができていない。(男を少し待たせるのがデート作法なのだ。)待つ間僕はうやうやしく中に通されたが、そこは食堂で、バーバラの家族が客を混じえた大人数で夕飯のまっ最中だ。その連中が代る代るこっちを見ては、「まあ何てかわいいでしょ」とか何とか言う。こっちはちっともかわいいどころではない。さながら針のむしろに座らされた心地だった。

あのはじめてのデートのことは、今でもまざまざと覚えている。バーバラの家から、街に新しく

ひとがどう思おうとかまわない！

できた小さな映画館まで行く途中、僕らはピアノのレッスンの話をしていた。まだ小さいころ、僕はピアノを習わされたのだ。ところが六か月たっても僕はいかかわらず『ひなぎくさんの踊り』を弾いている。まったくもってうんざりしてしまった。もともと「女みたいな奴」と思われるのがこわくてしかたがなかった僕が、来る週も来る週も『ひなぎくさんの踊り』にひっかかっているのは、拷問にあうよりまだつらかったわけだ。だから僕はついにピアノをあきらめてしまった。そのころというわけか僕は「弱虫」とか「女みたいな奴」とかいうことにえらくこだわっていたから、おふくろの言いつけでマーケットに、ペパミント・パティとかトーステッド・デインティーズなどというような可愛い名前のおやつを買いにいくのさえ、きまりが悪くて困ったものだ。

さて、映画のあと僕はバーバラを家まで送っていった。そして忘れずに彼女のはめているきれいな手袋をちゃんと賞めたあげく、ドアのところでお休みを言った。

するとバーバラは

「今夜はとても楽しかったわ、どうもありがとう」

と言ってくれた。

「どういたしまして。」

僕は天にも昇る心地だった。

次に別な女の子とデートしたとき、例のお休みを言う段になると、彼女もまた「今夜はとても楽

しかったわ。どうもありがとう」と言うではないか！ 僕の嬉しさが半減したのは言うまでもない。三人目のデートでまた「お休み」の段になると、この女の子も例の科白を言おうと口を開けた。

僕はすかさず

「今夜はとても楽しかった。どうもありがとう」と言ってやった。

「今夜はとても楽し……あらどうしましょう。でも私もとても楽しかったわ。どうもありがとう！」

この海岸グループが、パーティをやったことがある。このとき僕は台所で、年上の奴にキスのしかたを教わっていた。練習台は彼のガールフレンドだ。「唇はこういう具合に、こう直角にもっていかないと鼻が衝突するぞ」といった調子だ。そこで僕はさっそく客間に行って女の子を見つけ、ソファに座って彼女の肩に腕を回し、この新しい技術の実験をおっぱじめた。ところがその最中、みんなが何となくざわめいたと思うと、

「アーリーンだ、アーリーンが来るぞ！」

と口々に言いはじめた。アーリーンとはいったい何者だろう？

そのうち誰かが

「アーリーンが来た、アーリーンが来たぞ！」

と叫ぶと、みんな今までやってたことをうっちゃって、この「女王」を見ようと飛んでしまった。見るとアーリーンはたしかに美人だ。みんなが騒ぐのも無理はなかったが、こっちは誰かが来たからといって、今までやってたことまでそっちのけにするなんぞというような、法外なやり方はがぜん気に入らない。だからみんなが一人残らずアーリーンの方に行ってしまったあと、相手の女の子と二人でソファにがんばっていた。

（あとでアーリーンと親しくなってから聞いたところによると、彼女は、とても良い人たちがたくさん集まっていたパーティがあつて、ただ一人だけ変な奴が、ソファの隅っこで女の子とベタベタしていたのを覚えていたそう。ただ、その二分前にはみんなだって僕と同じことをやっていたのを、知らなかっただけの話だ。）

僕がはじめてアーリーンと口をきいたのはあるダンスパーティのときだった。彼女はえらく人気があったから、どいつもこいつも何とかして彼女と踊ろうと、ひっきりなしに割って入る。僕もそのときアーリーンと踊りたいもんだ、どうすればうまく割って入れるかと、腹の中でしきりにタイミングを計っていたのを覚えている。そのときだけではなく、どうもこのところはいつも苦手なのだ。もとより彼女が向うの方で誰かと踊っているとき割り込むのは、いくら何でもちょっと無理だ。もっと近くまで来るのを待つとしよう。ところがせっかく彼女が近くに来たときに限って「こいつはまずい。この曲は苦手なんだ」てなことになる。そこでもっと自分に向いた曲になるまで待

つという寸法だ。さて曲が変わって僕の得意なものになったから、思いきって彼女の方に足を踏み出す（少なくとも自分ではそのつもりだ）。そしていざ割り込もうとすると、寸前に誰かほかの奴にさつと横取りされてしまう。またすぐに割り込むのは紳士の礼儀に背くから、しかたなく数分待つことにする。やっと数分たっていざ、と思うころには、彼らは踊りながらこっちの手の届かぬ方に行ってしまうているか、曲がまた変わっているかで、とにかくまたもや都合が悪くなっているのだ！

この調子でさんざんもたしたあげく、とうとう

「アーリーンと踊りたいもんだな」

とぶつぶつ言ったところが、僕の仲間がいち早くこれを聞きつけ、そのあたりの連中の前で大声をはりあげてしまった。

「おい、みんな聞いてくれ。ファインマンがアーリーンと踊りたいんだとさ！」

間もなくアーリーンがほかの男と踊りながら近づいてくると、悪友の面々は僕をむりやりに押し出してしまった。そしてついに僕は割り込みに成功したのである。僕は開口一番、

「そんなに人気のあるってのは、いったいどんな気持のものかい？」

と正直な質問をした。しかしアーリーンの答を聞く暇もなく、また誰かに割り込まれてそれきりになったのは残念だった。

僕も悪友どもも表向きは決してそうとは言わないが、みんなひそかにダンスのレッスンに通った